



# 勝沼氏館跡調査概報

山梨県教育委員会  
勝沼氏館跡調査団

## はじめに

昭和 48 年 12 月から行った勝沼氏館跡の発掘調査の概報を発刊する運びとなりました。

本遺跡は古来文献・口碑等で勝沼氏館跡として云い伝えられて来た中世館跡であります。

第4次までの調査により土壘・堀・建物礎石等の遺構、陶磁器・土師質土器・鉄器等の遺物を検出した。かえりみて中世館跡の発掘調査は全国的に數少なく本県では最初の試みであります。調査はなお継続中であります。今後もまた多くの歴史的に貴重な発見が予想され、また、同時に文化遺産として保存活用の方途を講じていきたいと考えております。その結果、本県はもちろん日本中世史解明への一助ともなれば幸であります。

ここに本調査の一里塚としての概報を発刊するにあたり、地元関係者及び発掘参加者並びに調査員各位に対し深い感謝の意を表し、あいさつとする次第であります。

昭和 50 年 3 月 31 日

山梨県教育長 丸 茂 高 男

## 目 次

### はじめに

1. 経過	1
2. 位置と歴史的環境	2
3. 勝沼氏について	6
4. A区及びB区の遺構	8
(1) 建物址	
(2) 溝・水溜	
(3) 土 墓	
(4) 掘	
(5) その他の遺構	
5. A区及びB区の遺物	17
(1) 鉄 磁 器	
(2) 土師質土器	
(3) 雜 質	
(4) 金 属 製 品	
(5) 古 銀	
(6) 石 製 品	
(7) その他の遺物	
6. C区の遺構遺物	22
7. 館跡の浅層地質と水	24
8. 館跡にあるヤダケについて	24

## 勝沼氏館跡調査団組織

団長 野口二郎

団長代理 故佐藤森三、植松又次

調査員 野沢昌康、上野晴朗、佐藤八郎、服部治則、西宮克彦、広瀬俊将  
植松春雄、羽中田壮雄、桂田保、早川方明、折井忠義、清雲俊元  
雨宮安洋、渡辺礼一、田代孝、土屋政司、雨宮誠、土尾勇、萩原  
三雄、小野正文、桜林芳秋、藤本丑雄、池田敬雄

事務局 教育庁文化課、勝沼町教育委員会事務局

## 勝沼氏館跡調査概報執筆編集関係者（50音順）

### 1. 調査団関係者

上野晴朗、植松春雄、小野正文、折井忠義、田代孝、西宮克彦、萩原三雄  
早川方明、森和敏、渡辺礼一

### 2. 山梨大学学生

出片洋文、志村美千子、室伏徹、八巻与志夫、渡辺孝子

## 凡　例

1. 内容は第1次から第4次までの発掘調査の概報を主とし、その他の調査も若干取り入れた。

2. 本書の編集は勝沼氏館跡調査団考古班が主として担当した。

3. 報文中使用する遺構記号については平城京調査方式にならい、それに若干加味した。

数字は遺構番号であるが必ずしも連続しない。

S = 遺構 D = 溝 P = 水溜 B = 建物 Z = 集石

A = 土塁 H = 塔 X = 不明

例 S D = 0 1

遺構 溝 = 番号

4. 方向は便宜上口川側を南とみなし、それに相対する方角名をとった。

## 1. 経過

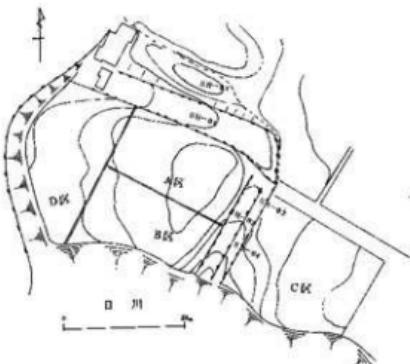
この調査は勝沼町が県立ワインセンターを誘致するために、この土地を買収し、センターの建設工事を行う以前に文化財保護法に基づいて発掘を始めたものである。しかし、発掘が進むにしたがって遺存状態が良好な遺構が発見されたとともに、歴史的に重要なことがわかったので、精密な調査を行い保存することになったものである。

**第1次発掘** 昭和48年12月16日から23日までの間予備調査としてセンターの予定敷地とされていた館跡中核部の北東 $\frac{1}{4}$ をトレント方式によって発掘を行った。発掘が進行するにしたがって石を使った多くの溝や建物の礫石が発見された。12月23日には予定のトレントは発掘がほぼ完了したが、ほとんどのトレントに遺構が検出された。

勝沼町教育委員会並びに調査員はこの発掘を続行しなければならないと判断して、第2次発掘を行うことに決定した。

**第2次発掘** 昭和49年1月4日から30日までの間をあらかじめ発掘期間に設定した。第1次発掘地区をA区と決め東西2条、南北1条のセクションベルトを残してトレントを拡張した。第1次発掘で発見された溝はさらに延長し、建物址は多くなり、水溜も2ヶ所発見されるに至った。これに伴って陶磁器破片や土師質土器などの遺物も出土した。A区は嚴寒の中で難行したが予定期間中には発掘が終了し、遺構はB区・D区にもあることが判明した。

このような状況の中で第2次発掘が終了した時点で、ワインセンターは東の隣接地C区に建設されることになり、館跡中核部は保存されることになった。



第1図 地区割図

**第3次発掘** C区は建物の敷地となる場所に南に向いてL字型にグリッドを設定し、49年2月26日から3月10日まで発掘調査した。C区内の東部には遺存状態の悪い水溜が2ヶ所と2列の列石が検出され、北側では用途不明の扁平粘板岩によって構築された遺構などがあったが、全体として遺構の遺存状態は悪かった。この間に未掘部分に東西2条のトレントを設定したところ外縁が発見された。

なおこの発掘は2月20日に県教育委員会が委嘱した勝沼氏館跡調査團によって行われた。

**第4次発掘** 館跡の南東約 $\frac{1}{4}$ 強を占める部分をB区とした。発掘期間は49年4月27日から9月30日までであったが梅雨などで発掘が難行した。この期間中並行して文献調査・地形地質調査・動植物調査・建物調査を行い、総合調査を進めた。

発掘調査はグリッドにより4月27日から7月10日まで表土はぎ作業を行い、7月10日から遺構検出作業に移った。B区はA区に比較して大きな建物址や水路が多く、今後性格や用途について検討しなければならない遺構が多くあった。またそれらの遺構は著しく高低差があり重複している箇所も認められた。

文献調査は史料をさらに詳しく調査し、地形地

質調査は水源や掘について電気探査などを併用した。動植物調査や建物調査は植生や建物址の性格について検討した。

なお、第4次発掘終了後凍結や風化防止のため、発掘完了箇所の全面を砂やこもで被覆し、その保全に万全を期した。

**第5次発掘** 鮫跡の西約 $\frac{3}{5}$ をD区とし、  
グリッドを設定して49年10月30日から12月12日まで表土はぎ作業を行ったところ石組や溝状遺構の上部が発見され始めた。

3月に遺構調査を再開する予定である。

## 2. 位置と歴史的環境

勝沼氏館跡は、山梨県東山梨郡勝沼町勝沼大字御所にある。甲州街道の古くからの宿駅、勝沼宿上町にそい、日川の右岸、祝橋のたもとの河岸段丘上に立地している。勝沼町を東西に流れる日川は、柏尾以東の渓谷より流れ出した水勢が、柏尾の付近から西に向って扇状地を形造っており、甲府盆地の東方の高位置を占めているため、この付近からの峠東の盆地の展望が絶佳となるところにある。

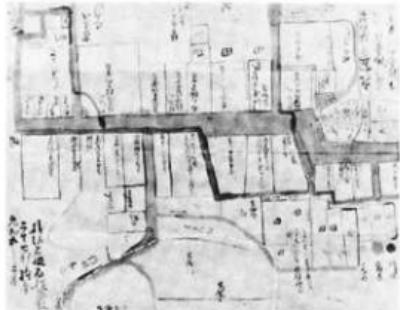
勝沼氏館跡付近は、古来から甲州ぶどうの発祥の地として知られ、遺跡地も江戸中期以後はぶどう畠が多いことが正徳検地によって知られる。また現在においても周辺一帯は人家のほかぶどう



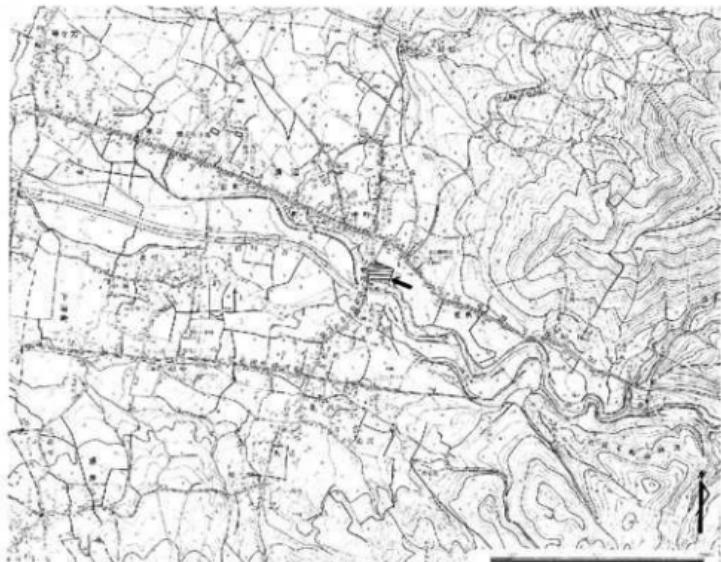
第3図 宣文十二年用水出入村綫図

圓ばかりである。

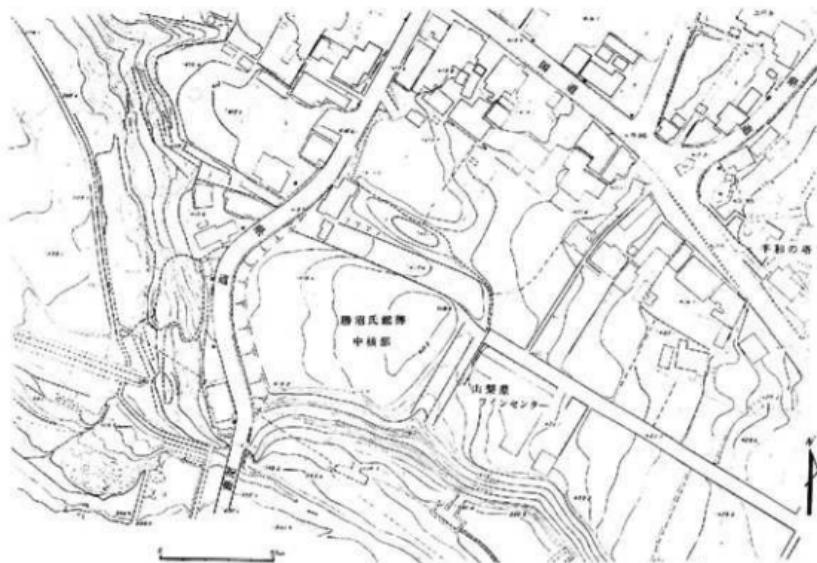
現在国道2号線となっている甲州街道は、館のすぐ北側約100mばかりのところを東西に走っているが、この街道は元和5年から勝沼が初めて宿方として取立てられてからで、中央線の開通までは、甲府盆地への玄関口として賑わいをきわめていた。慶長前はこの道は都留郡から武相への重要な往還であったが、そのルートは山梨市の田中から日川を渡らずに川の南を東に向って進み、野呂から岩崎にかかり、横吹の桜木、横坂というところから今の甲州街道に出ていた。従って館跡の南の日川の左岸を昔時の往還は走っていたわけで館跡が都留口-武相方面への警護の意味が強かったことが窺えよう。また同じように鎌倉の脇往還が、北の堰坂口から南の御坂口に向って祝橋のすぐたもとを南北に走っており、中世はやはり非常に往来のはげしい幹線道路であった。従って勝沼館跡は武田氏の領国支配体制の上で甲府盆地の主として都留郡方面への警衛に任じるとともに、奥東に集中して多い守護領以来の伝領の交通・経済などの非常に重要な要のところに立地環境を求めたことが理解される。このことは、日川ぞいに地縁続きになる下岩崎の岩崎氏館跡にもいえるのであって、14・5世紀に栄えた豪族岩崎氏の居館址が今もなお残されている。由来甲斐武田氏の守護の領地の多い奥東の盆地には、武田氏の分派として小佐手氏、栗原氏、岩手氏、松尾氏などが分派して、勝沼氏、岩崎氏などとわずかづつの時代



第2図 元和五年勝沼村絵図



第4図 勝沼氏館跡位置図



第5図 館跡地形図



- 1. 中核部(内郭)
- 2. 虎口(御門口)
- 3 ~ 4. 内 堀
- 5. 外の土壘
- 6. 外 堀
- 7. 外の土壘
- 8. 外 堀
- 9. 東の郭
- 10. 水上屋敷
- 11. 西北の郭
- 12. 御先手小路
- 13. 泉勝院
- 14. 太鼓櫓
- 15. 日川
- 16. 祝橋
- 17. 甲州街道(国道20号線)

第6図 勝沼氏館跡全景(南より)

差をもって栄えてきた。

さて、勝沼氏館跡は甲斐国志に、「村ノ南ニアリ、御所ト呼ブ、荒畠残溝縁カニ存セリ」

とあり、また甲斐国古城跡志には、山梨郡勝沼村之内、城跡一ヶ所として、

「但シ二町四方バカリ、二重ノ堀アリ、御殿跡ト申スハ茶ノ木ヲ植置候、前ハ日ツ川ト申ス川御座候、太鼓櫓ノ跡ト相見エ、少シ高クコレ有リ、是へ登り見申シ候ハバ中郡筋相見エ候、御殿ノ跡ハ只今御所ト申伝ベ罷リ有リ候」

とあり、さらに東山梨郡誌(大正5年)には

「御所 勝沼町の南方、日川に沿ひたる懸崖十数丈の一耕地に、字御所と称する所あり、是れ勝沼五郎信友の城跡なりと、今石垣の存するものあり。又近傍に御風呂の間、御厩屋敷、工匠屋敷等の名称あり。町の横道に御先手小路(俗称長手小路)、筋達見付(俗称筋道)、御蔵道

等の名をも存す。信友は武田信虎の同母弟なりしが、本家に背き、永禄三年兄信虎のために亡ぼされたり」

と見えている。以上の資料に見える地名伝承は今もよく残されている。ことに東と北側の堀と土壘は試験の結果二重構造で、甲斐国古城跡志が指摘しているとおりである。また太鼓櫓というのは元禄以前の検地絵図には地蔵とあって、後述の勝沼氏の菩提をとむらうために建てた地蔵があったものの如くである。さらにまた昭和初年までの分間図には原野としてあり、地形は小高い山になつていて、勝沼町内の60才代までの人々は太鼓櫓の上で遊んだのを今も覚えているという。

このように勝沼氏館跡は「勝沼五郎の御所跡」として町民の血や肉となって伝承されてきたのであるが、昭和初年に塙山-市川大門線の県道がこの館を分断する計画をもったとき、上町に住む坂

木久太郎氏が、自分の代に勝沼五郎の館跡が滅びるのは見るに忍びないと、強硬に反対して、自分の上地を犠牲にして、守りぬいた美談があるという。以来、館跡のはとりには、勝沼氏館跡であることを示す木碑が建てられて史跡として守られてきた。

いま、航空写真によって検討してみると、館は発掘されている中核部（内郭・近世でいう本丸）の場所を中心にして、東（県立ワインセンター）、北西（玉翠苑）にわたって郭の施設は伸びており、ワインセンター敷地内には二重堀と土塁、用水施設、その他があり、玉翠苑敷地内には上塙の跡と堀割の跡が認められる。御先手小路と筋道見付は御所の館を中心に鉤の手に道路が伸び、全体の縦張りの中で設定された様子が看取され、その御先手小路の先端が、勝沼氏の菩提寺の泉勝院（長遠寺跡）である。またその付近に加賀屋敷、奥屋敷と呼ばれているところがある。県立ワインセンターの東方は土塙をもって仕切り、水上屋敷と呼ばれているが（家臣の屋敷といい伝えている）、ここにも実査と航空写真で検討すると、数軒の軒並とした尾敷割の跡が見られる。また社記・寺記等によれば鳥居平の西南の斜面には、館の鬼門除けとして尾崎明神・福徳稲荷が祀られている。

勝沼氏館跡の発掘状況が示すように、わりに純粹に遺跡が保たれているのは、館が廃絶して以後、公けの荒廃地として長く保存されていたからである。即ち勝沼古事記（勝沼町資料集成）によると次のようにその変遷がわかる。

天正十五年 柏尾山ニ八幡松葉様ヨリ御舎弟方御兩人為ニ御菩提。御所江座像石地蔵尊ノ居ル  
(後略)

慶長二年 御所御城跡改発被御付村中ニ而仕候

慶長七年 御所大穀像江小次郎様、円三郎様御菩提ニ座像地蔵尊ル、後ニ柏尾ニ而大滝山不動尊ニ王門建村中奉加、他所迄御向人御法名切ル由

元和五年 今年始而宿方ニ相成勝沼宿と申候  
寛永十九年 御所より上行寺へ紅葉柳を持來リ  
門ノ脇と庭中へ植付申候  
寛永二十年 御神樂是迄御所之煙ニ御座候得  
此度村中相談宿へ引場所もめ圓収ニ而出口ニ定期

元禄六年 大出水御所下通り田畠多分扣事申校事

宝永六年 当年御所御城跡御見分御役人向参  
而留リ乱心ニ成柏尾山引越申候、山犬ト戰由…  
(また別の記録に) 富川ニ甲府より又々御家老  
之御城ニ被成候旨ニ御所城跡御見分ニ付御役  
人御出御泊り、早急乱心ニ成人有之夜中柏尾山  
を越候、山犬ト戰村中惣人足ニ而相尋候所翌日  
深沢之奥ニ而血だらけニ成候見付申候

〔下略〕

以上のように、天正十年武田氏滅亡以後にも御所の地は村人の間に強く意識され続けており、ことに迎慶尼（松葉様）が武田氏に滅ぼされた兄弟二人の菩提をとむらっているのは注目される。また御所城跡の開発が慶長二年（即ち慶長後地にからんで）行なわれていることも非常に重要なようと思う。開発とはいっても御所の中心地が元和五年の村絵図を見ると古城跡として名をとどめており、勝沼上組の百姓家数は二十七軒であって、屋敷割も街道に沿ってのみ建てられている。また下って寛文十二年の用水堰の出入に描かれた精細な村絵図を見ると屋敷・畠・田・新田と戸籍等の管理のもとに区別されており、古城跡の付近はすべて上畠・中畠・麦田で民家が自由に建てれるというような草創なものではなかった。それだけに、さらに下って勝沼古事記の宝永六年の条に、柳沢吉保の家老が新たに御所を城に見立てようとして検分しているのは、江戸時代の中頃において幕藩体制の支配者がまだこの御所の地を重要視している証左として注目されるものがある。

以上のような結果を総合してみると、四隅の土塁が削平され、平均に地均しされ、礫石類が厚

く被覆されてしまったのは慶長二年頃と推定されその後御所の中核部をのこして民地として払い下げられ、上・中畠もしくは新田として開発をうけたのである。さらにまた上町の向山公次家に残される名所限出畠略図帳によれば、この資料は寛文一元暦期のものであるが、旧勝沼村の田畠が一筆毎に付立てられており、御所の中核部から水上屋敷、夏秋（御所の東）にかけては甲州葡萄が散発的に栽培されている。それがさらに正徳検地帳にいたると、甲州葡萄は一層集中的に御所から夏秋にかけては栽培されるようになる。（勝沼町誌葡萄編）

このように、勝沼氏館跡は慶長期以後開発されて民有地となり、やがて中核部も上畠・中畠として現在にいたったもので、発掘の現状に見られるように廃棄以後わりに良好に遺跡がのこされたものである。

また中核部（内郭）を中心にして周辺にひろがる御手先小路、筋道見村、御藏道、御厩屋敷、工匠屋敷、水上屋敷、太鼓櫓の存在は、武田氏家臣團のうちの単なる在宅豪農敷の機能として考えるのはかなりかけはなれた大規模のものが想定され、そこに勝沼氏館跡の今後の研究課題としての重要な問題がのこされている。

### 3. 勝沼氏について

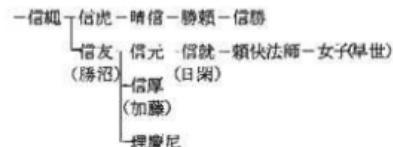
勝沼氏は、本宗武田氏によって滅ぼされているため、他の多くの類例と同じく史料の焼滅をうけて、確実な伝承史料というものがきわめて少ない。甲斐国志・人物部に

「勝沼五郎、武田系岡ニ信虎ノ弟次郎五郎信友安芸守、勝沼殿ト称ス、永禄三庚申年閏月三日死ス、法名ハ不山道存庵主、一二道厚、男丹波守信元、二男信原又信厚、加藤丹後守ト称ス、天正千午三月十二日武州箱根崎ニ於テ死ス、年四十三、法名ハ傑宗道英居士ト記スアリ、後人ノ

誤伝ナラン、末ダ考ヘズ、信元ノ男僧トナル、名ハ日闇、相州信院ニ住ス、信院院ハ相州馬入川ノ辺今井村ニアリ、勝沼泉勝院ノ牌子ニ開基ハ勝沼殿ノ御局警座理風大師、弘治三年巳二月十日逝ス今勝沼院ニ作ル、勝沼殿ハ長遠寺駿快翁道後禪定門、又福正院殿光山峰公禪定門、同奥宗正院殿華岳榮公大師トアリ、皆年月亡ス、卒後妙榮ハ信姫ノ夫人、信虎母ナリ、信友亦同母ナラン（下略）」

と、見えている。また武田系図には次のように見える。

武田系図（勝沼氏）



さらにまた甲斐国志は、勝沼氏の滅亡問題にこれ次のように記録している。

「軍艦大全伝解等ニ信玄公勝沼入道ノ息女ニ御手ヲ掛ケラレ、古龍岡小路ニ屋敷ヲ構ヘアレ置カル、又勝沼殿御成敗ハ武藏ノ藤田右衛門ト内通ノ事発覚スル故ナリ、ト云々、勝沼入道トアルハ信友ニテ五郎トアルハ信元ノ事カ、伏殊ノ後其刃傷トナリ相州ニ在ルユエ、叔母理慶尼モ老後彼處ニ往キシナラント聞コユ、然レドモ都留郡岩殿七社権現永正十七年ノ棟札ニ、御奉加鳥目百匹、武田左衛門大輔ト誌セリ、勝山記ニ天文丙午八月廿二日、相模ノ屋形勢ツカヒ食サレ候テ人数二万四千、御方ハ二千許リニテ軍ヲ成サレ、小山田殿マケ食サレ候、彈正殿、大輔殿、侍ヒ者、周防殿、小林左京殿、下ノケンダン、隨分ノ方々打死食サレ候、殊ニ勝沼ノ人数以上二百七十人打死候、トアリ、人頭税トハ武田左衛門大輔信友ニテ、即チ勝沼ノ事ナルベシ、時代廿六年ノ達ヒアリ、今コレヲ訂定ス但シ倉兄信虎ノ女穴山信友ニ嫁スル所ナリ、其男梅崖ハ初メ左衛門大夫ト云ヘリ、近族ニシ

### テ同名ハ種カナラズト謂フベシ」

と一応疑義をはさみながらも、勝沼信友が天文四年（1536）八月二十二日に戦死したことを勘校している。この天文四年の合戦というものは信虎が今川氏綱との間で不和に陥り、万沢口で今川軍との間に合戦をおこしたのに起因し、（為利御集）このため北条氏綱が氏綱の救援に篠坂峠を越えて山中に攻めいってきた戦いを指すのである。それを迎え討った小山田信有、勝沼信友の率いる甲州勢は数々の敗北を喫した。ところが信虎にとつて幸運だったのは、川越の上杉朝興軍が氏綱の甲斐出陣の際をねらって小田原城を襲い、大破・半塹付近を焼略したので、氏綱の軍は急ぎ甲州から兵を引き、小田原に取って返したので、信虎はあやうくこの危機を脱することが出来たのである。

なお勝沼信友が小山田信有と組んでいるのは、信友が勝沼に居館を構えて郡内領の目付となっているからである。これは小山田氏に対する信虎の牽制策であった。妙法寺記によると、信虎は永正五年（1508）十月、父信綱の時代から深刻に繋いでいた叔父油川信憲（信綱の異母弟、母は郡内小山田氏といわれる）との戦いに出陣し、継嗣問題に終止符をうたつけれども、そのとき郡内小山田氏は油川氏につき、伊豆山の北条氏を頼って信虎に抵抗した。信虎と小山田氏の戦いはその後永正七年まで続くが、妙法寺記によると、この年「國中都留郡和睦落付……」とあり、和睦が成立し、信虎はその条件に小山田信有のもとに妹を嫁がせ、（武田系図一信虎は永正七年には十七歳である）同時に同母弟の信友を郡内領の目付として配したのである。上記の永正十七年（1520）の岩籠の七社権現の棟札の竿頭に、「鳥目百四武田左衛門大輔信友」と見えるのも、そうした理由からである。信虎と信友は母と同じくしていた関係上、これという確執はなかった模様で、大永六年（1526）八月十二日の境川村石橋八幡神社の棟札に「奉再立正八幡宮神祇之事 敬白 大塙那 武田信虎 勝沼氏信友（下略）」の兄弟

連名の記録をとどめている。同じ村の三柄の熊野権現の制札に明応五年三月の武田信綱の火押書がのこされているから、恐らく境川村周辺は父祖以米の守護の伝領だったのであろう。

勝沼信友は法名は不山道存庵主と見えるが、出家得度したのが何時かわからないが、勝沼入道とはそのため称されてきたようである。天文四年戦死したとき、信虎の年齢から推定すれば、三～五歳くらいの差を勘案すれば三五～四〇歳以内くらいということにならうか。

勝沼氏は信友の戦死後は、嫡男の丹波守信元（信基とも）が継嗣する。父の次郎五郎信友に対して五郎信元といい、甲陽軍鑑その他に勝沼五郎と一般にいわれているのはこの人物である。軍鑑その他に散見する動静を見ると次のようである。

- 天文十一年八月 かつぬま殿、信濃大門跡の合戦の際逸見殿、南部殿、栗原殿、日向大和守と共に幕訪の城に布陣（甲陽軍鑑）
- 天文十四年六月 貧輪城攻め、勝沼・小山田穴山氏らの扱いにて和談成立（妙法寺記）
- 天文十五年十月 勝沼氏、上杉憲政の關東勢と筈吹峠にて、板垣信方を大将とし小山田・逸見・栗原・おぞ・南部・日向・小宮山氏等と共に合戦に出陣（甲陽軍鑑）
- 天文十六年十月 勝沼殿、信濃海野半の長尾景虎との合戦に陣備えの御後として出陣（同）
- 天文十九年八月 信濃・深志攻略其の他に勝沼衆出陣（甲陽日記）
- 天文二十二年五月 勝沼五郎、信濃桔梗原の小笠原長時との合戦に出陣（甲陽軍鑑）
- 永禄三年十一月逆心の文あらわされて勝沼五郎殿御成敗される（甲陽軍鑑）

このような記録を見ると、勝沼氏は武田信玄の有力な臣僚として、いわゆる御親類衆（親族衆）の一員として常に重要な軍事力（軍役）の一端を担っていたことが知られよう。

永禄三年の滅亡の記録については、甲陽軍鑑に次のように見えている。

「永禄三年 雅月三日 甲州勝沼五郎殿御成敗の儀、前末の午より御田付御小人頭を殊の外馳走有故此由を付人衆頭より隠密にて言上仕り、横目の御中間衆も心付て甲州恵林寺の入、中牧と云所に待て、怪しき者を捕へたれば、武藏国藤田右衛門と云侍大将と勝沼五郎殿内通有り、信玄公御出陣の御留守に甲州東郡へ藤田右衛門を入れ、五郎殿甲州府中へなをり候はんと有逆心の文あらわれて勝沼五郎殿御成敗なり、其跡三百八十騎の同心被官、二百騎をば詰部大炊助に預下され、八十騎をば御令弟信連へ進め置かるるなり。」

これによれば、武田氏に館を攻められて滅ぼされたというのではなく、当主だけが首を打たれたか、あるいは訴め腹を切られ、家臣達は詰部大炊助や武田信廉などに再び官を許されたものようである。なお軍鑑伝解には次のように見える。

「或る半武田の一家勝沼五郎殿、訴人岩間大蔵左衛門と別して入強ありて人の取りやりなされ彼大蔵左衛門に乍々合力などしたまふに付て、目付衆やかて申上る、信玄公聞召、訴人と定むる者に近づき、殊にしたしき儀不審のたつ様子なりとて、御せんさく候へば案の如く五郎殿関東武藏の大石一党と内通にて、逆心の企頭はれて其年中に勝沼五郎殿を信玄公御成敗され候なり。」

以上のような状態で勝沼氏は滅んだというのであるが、弟の加藤丹後守信厚（信原とも）は、勝沼氏が武相口に備えた関係からか、上野原の柏州津久井口の境地警備、加藤氏の名跡を継いだと考えられており、兄と同じ運命をたどったらしく、その足跡はほとんど判明しない。勝沼入道の娘といわれる松葉は兄弟連に連坐することはなかったが、この事件のあと、土地の豪族兩宮某から離縁され、大善寺に入って尼となり桂樹庵理慶尼といわれた。甲斐同志には次の如く見える。

「理慶比丘尼 伝へ云フ勝沼入道不川ノ女ナリ、

桂樹庵ト号ス、初メ兩宮某ニ嫁セリ、勝沼氏跡セラルノ時、兩宮某縁ヲ断チテ其ノ難ヲ逃ク、婦人ハ柏尾山ニ入り護摩堂ニ阿闍梨慶昭ヲ師トシ厄トナリヌ、此ノ時既ニ妊メル有リ、一子ヲ産ム、男女ヲ詳カニセズ其裔孫アリ、草保中死シテ後ナシ、從者ノ胤ト云フ者四人、今大善寺ノ門前民戸ニ在リト云フ、寺宇ニ理慶ノ仮名文二巻、午ノ三月勝沼大姫此ニ走来リ、理慶ノ庵室ニ一夜投宿シテ出野ノ郷ニ赴キ歿死セル始末ヲ手書シテ高野山引導院へ贈リシ草案ナリ（中略）、理慶ハ慶長十六年八月十七日寂ス、同寺ニ葬アリ」

と見えている。内容的にやや勘考の余地があるとされているが、前出の史料にある天正十五年に御所の館に兄弟の菩提をとむらっているのも、勝沼一族の末路の衰れを物語っているようである。いずれにしてもこのように信友の死後、五郎信元が勝沼を離いで、やがて武田氏に亡ぼされたもので、理慶尼の行動によってそれは明らかである。これらの梗概は、やがて発掘結果によって、さらに確実な史実が明らかにされていくであろう。

#### 4. A区及びB区の遺構

##### (1) 建 物 址

建物址は礎石の高さ、柱間の長さや周囲の状況を勘案して連結出来るものについては全て延長してみた。この詳しい検討や重複関係については本報告に譲ることとする。

なおSB02とSB03の下部には現時点で東西8間南北5間の建物址がボーリング調査等によって確認されており、SD01はこれと方向・高さが一致する可能性がある。

SB01 東西27.6m(9尺)、南北26.8m(9尺)である。SB02の西に隣接し並行しておらず、礎石はSB02より約8cm高い。柱間は13.6m(4尺5寸)で、現時点ではこの建物だけ特別の長さをとっている。付近に鉄製品が多く出土し

ている。

(SB 02) 東西のほぼ中心で北に寄っており、AB 区の中でも大きい建物址である。南側で東西 7.28m (4 間) 、東側で南北 5.46m (3 間) で、西側に約 1.70m (1 間) 、北側に 1.82m (1 間) の造り出しが見られる。中間には 0.91m (3 尺) の柱間があり、その西の 1 ケの礎石は SZ 01 で覆われていた。この建物址中間よりやゝ北側でこの下を SD 01 と SD 02 が横切っていると思われる。

(SB 03) 東西 5.49m (3 間) 、南北 0.98m (6 間) で柱間は 1.83m である。SB 02 の東にあり、これとは方向を異にしており礎石も 20cm 高い。南側にある石列 (SX-05) と並行しているので同時期のものと考えられる。

(SB 15) SB 02 の南西隅に隣接しており、礎石はこれより低い。東西 3.75m (2 間) 、南北 1.85m (1 間) で柱間は 1.83m である。礎石は他に比較して大きい。

(SB 04) 南北 9.10m (5 間) で柱間は 1.82m である。他に連結出来る礎石がないので現時点では一列である。

(SB 05) 南北 9.09m (5 間) の一列の礎石である。AB 区で最も石が少ない地域であるが、2 間においてこれと連結出来る礎石が 1 ケある。

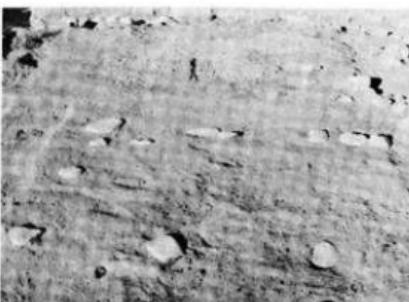
(SB 06) SP 01 と SP 02 に挟まれた場所にある。東西 3.70m (2 間) 、南北 3.73m (2 間) で石列がこの直上にある。

(SB 07) 南北 1.85m (1 間) 、東西 3.75m (2 間) である。礎石は 4 ケで抜取られた跡がないので東西は 2 間の柱間であったと考えられる。内側は礎石上面で土間状に堅い。

(SB 10) 南北 6.16m (3 間 3 尺) 、東西 2.57m (1 間 3 尺) で、2 ケの礎石は土塁の側溝上にあり、他の造構より高く浮いている状態である。礎石は小さく貧弱である。

(SB 08) 東西 3.72m (2 間) 、南北 3.64m (2 間) で、礎石は大きくしっかりしている。

(SB 11) 南北 7.28m (4 間) 、東西 3.64m



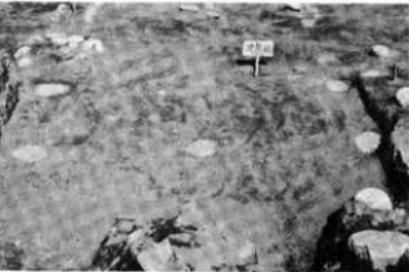
第 7 図 SB-01



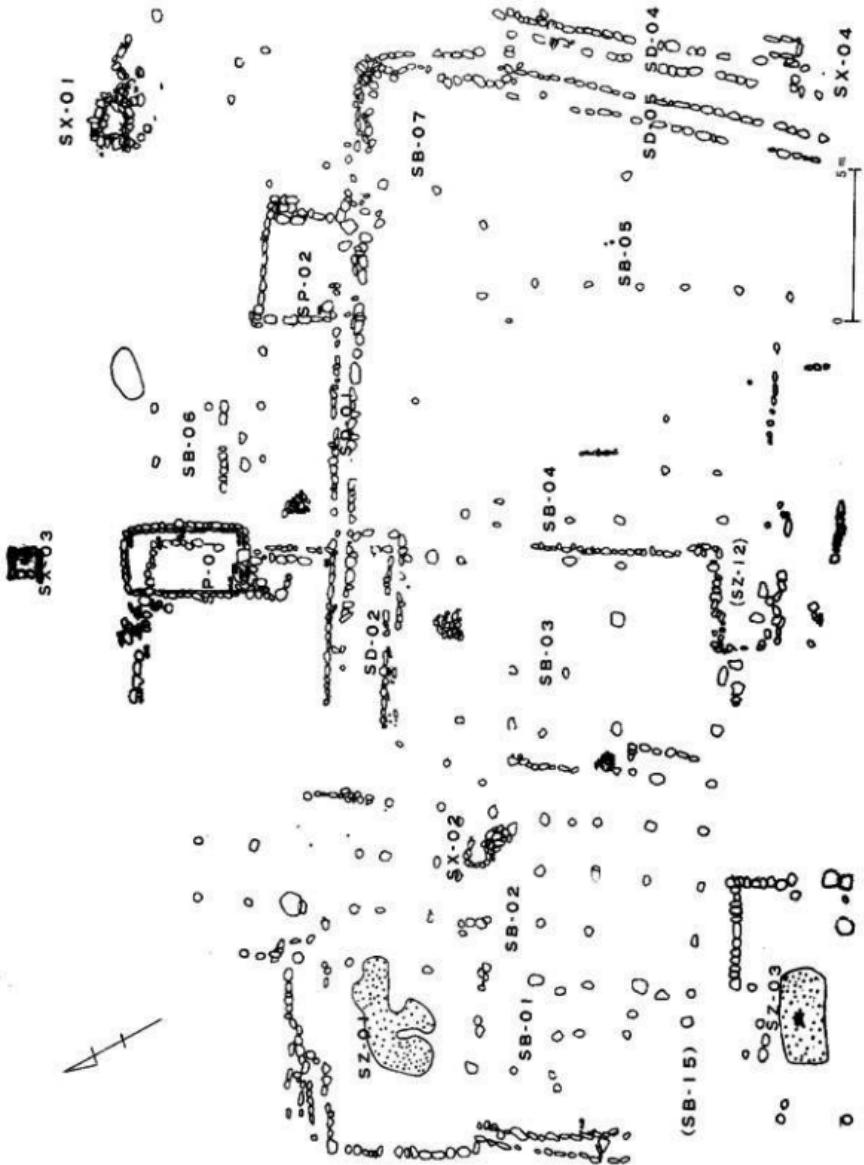
第 8 図 SB-02



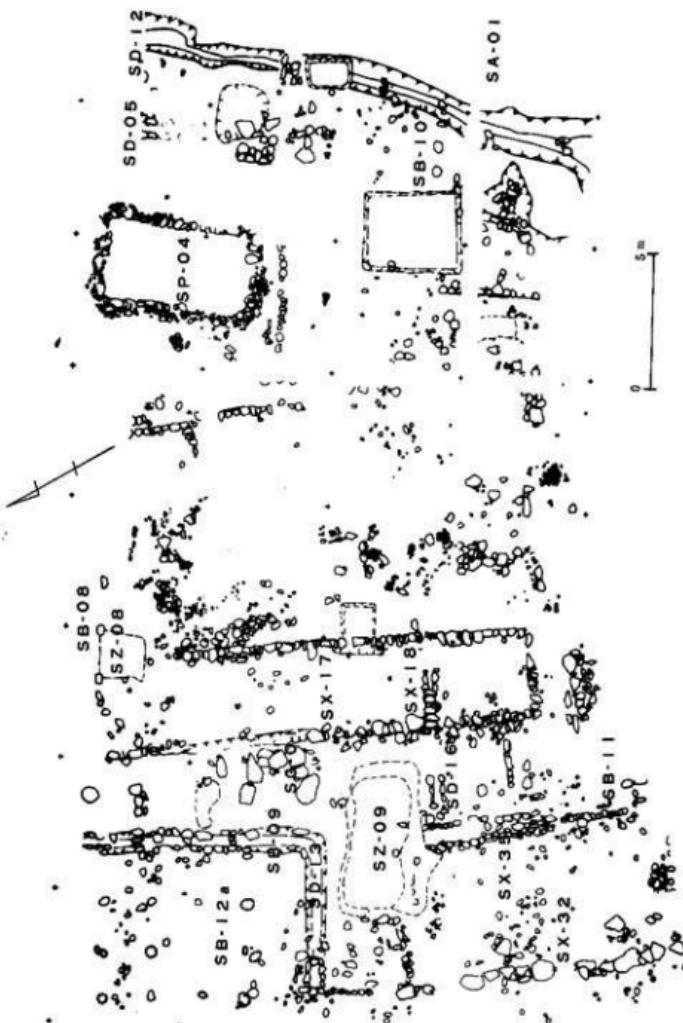
第 9 図 SB-09



第 10 図 SB-15



第II図 A区実測図



第 12 図 B 区 実測図



第13回 A・日・区 航 空 写 真

(2間)である。SX35の石列とSD14の下にあり、重複が多い箇所である。SX17とは方向を同じくしている。

(SB12-a) SB9の西にあり、SD12と接している。この建物址は黄色土の上にあったため、礎石をとられた跡が明瞭であったので図上復元できる。さらに西に延びる可能性がある。

(SB12-b) SB12aとはほぼ同一面に建てられていて、全般にSB12aより数センチ低い。

(SB12-c) SB12aの構築面を精査した時に落ち込みを発見したもので、これより約30cm下にある。この遺構もD区に延長する可能性がある。

以上の建物址に共通している点を上げておくと

(1) 建物には礎石を利用している。

(2) 平均柱間は1.82m前後である。

(3) A区に大きい建物址がある。

である。

なお、ここでいう一間はその建物の柱間の平均値をとったものである。



第14図 SB-12-a



第15図 SD-01



第16図 SD-04



第17図 SP-01

## (2) 溝・水溜

SD01：自然石を両側に縁石として置いた溝であり、その幅0.45m、深さ約0.4mとなっている。溝の西端部の縁石は失われていたが、約30mにわたって溝が残っていたことが確認された。さらに、西へ約9.5mの地点でSD06の溝が検出されているが、SD01の延長線上にあるところからこれとの関係を明らかにしていきたい。SD01の溝は、東からSP02の水溜の南側に接して、ゆるやかな傾斜で西流している。後に、SP02の6.5m東の地点で、SA01の土壙に並行して北流するSD04と続くことが明らかになった。これによって全長約38mとなり、現段階では最も長い溝である。

SD02：SP02から約7.3mSD01を西流した地点に、幅0.3mの縁石を置いた溝がSD01に直角に接している。この地点から約1.8m南流し、さらに約6.0m西流している。その西端部はSD01と同じく縁石は失われている。なお、この溝からは多数の上部質土器が検出されている。

**S D 0 4** : SA01の土壁内側の基底部にそって北流する溝である。その幅は0.49mあり、南端部から北へ約8.5mの地点で西流するが、すぐ北流してSD01に続いている。

**S D 0 5** : SD04の西側約1.3mを並行している溝である。その幅は0.7mあり、北端はSD04に接しているが、南端は遺存状態が悪い。

**S D 1 2** : SA01の土壁内側の基底部にそって検出された排水溝である。その幅は約0.8m、深さ1mあまりで、V字形に地山を掘りこんだものであり、約1.8m南流して日川の急崖に落ちこんでいる。

**S D 1 0** : SA01の土壁内側の基底部にそって北流する排水溝である。その北端部でSA02の土壁にそって西流し、しだいに深さを増しD区に続いている。

**S D 1 8** : SB12aの東側と南側にそって流れる溝である。その幅は0.45mであり、東側の4.5mの部分は緑石を使用しているが、その他の部分については緑石を検出していない。南端・北端ともにまだ明らかになっていない。

**S D 1 6 • 1 4** : SX17の上部、暗渠の施設より続く溝であり、約2.5mの地点で南流と北流をしているSD14に続いている。

**S P 0 1** : 東西1.9m・南北4.0mの長方形の水溜である。深さは0.9mで自然石を積み上げている。底部はゆるやかな湾曲をなして、全面に鉄分堆積が検出されている。南側壁に接して約0.5m四方の石が二個検出されている。さらに、この水溜を埋め二次的に使用しているが、その性格は明らかになっていない。

**S P 0 2** : SD01に接した東西3.4m・南北2.4mの長方形の水溜である。深さは0.6mで自

然石を積んでいる。なお、水溜の東北隅には三段の階段が設けられている。底部は湾曲をなし、鉄分堆積も検出されている。内部からは多数の土師質土器が検出されている。

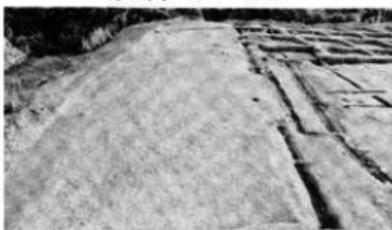
**S P 0 4** : 東西3.5m・南北5.5m、深さ0.8mの長方形の水溜状の遺構である。自然石を積み上げているが、その内部には大小の石が入っていたが、他には土師質土器、古鏡などが数点検出されただけである。底部にはSP01・SP02にみられるような湾曲がないこと、鉄分堆積が明確でないこと、さらに水の流入などの関係が判明しない段階であるので、この遺構については今後も検討をして明らかにしたい。



第18図 SP-02



第19図 SP-04



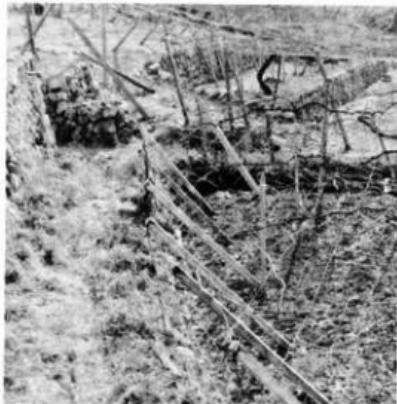
第20図 SA-01

### (3) 土 壁

S A 01：東面の土壁で、その幅14m、高さは約0.8mあり、東西に湾曲をなすが中央部は平坦になっている。南北に全長58mを測るが、土壁南端部は円形をなし日川の急崖に接しており、北端部はSA02の土壁に連なっている。土壁内側の基底部は中央でやや張り出している。基底部の検出状況から、土壁は地山を削り出したことが明らかであるが、その上部については、外側の堀からの立ち上がりと内側の排水溝からの立ち上がりの角度などから、一定の高さを想定することは可能であると考えられる。なお、平坦になっている土壁上部は削平をうけていて、遺構の検出はできなかった。

S A 02：北面の土壁で、東西に45mあまりが検出されている。その幅は約5.5mであり、SA01の土壁よりも狭いものとなっている。このことは郭全体の縄張り、建物配置との関係、地形上の制約などという点を考えなければならないと思う。土壁の東端はSA01に連なるが、西端部分などについてはD区の発掘を待って明らかにしたい。

### (4) 堀



第21図 SH-02

A・B・D区の中郭部をとりまく堀は、現存する鉤状に屈曲した内堀SH-01（東西方向）、SH-02（南北方向）とSH-02の東側に近接して並走するSH-03（南北方向）並びにSH-01の北側に付近の人々が通称外堀と呼ぶSH-04（東西方向）などがあり、一部二重構造であることが推定されている。なお、SH-04については、SH-01と並走する東西方向の外堀と考えられるが、現在は部分的に細長い窪地をなして残っているにすぎない。また、その規模や外堀SH-03との結合関係等は調査中であるが、堤道をこえて北西に広がる段丘面まで続いていることが予測される。

#### S H - 0 1

中郭部の北辺を東西に走るもので上面幅9~10m、現在の深さ1.5m~2mをなすが、内部の構造は明らかでない。西端は中郭部と外部との連結部（現在人家の在る地点）によって閉ざされているが、さらに続いている可能性がある。東端は鋭角（約80°）をなして屈曲しSH-02と連なっている。

#### S H - 0 2

SH-01とはほぼ同じ様相を呈している。そのまま南下して日川の急崖へと落ち込んでいく。

#### S H - 0 3

C区の調査の際、その断面の全貌が明らかになったもので、上面幅9~10m、深さ4~5m、下底部幅2.5~3mの逆台形断面をもつものである。SH-02とは上面で約4m、中心軸では約14mを離れて並走するが北へ向かうに従い距離がはなれています。内部は完全に土に埋れ、地表から堀の検出は全くできない。堆積土は大きく3層に分けることができる。上部は厚さ1~2mの黒褐色單一層、中間部では1~2mのレンズ状を呈する鉄分堆積層群、下部は灰黑色泥質土と植物堆積が交互に何重にも重なりあう泥炭層となっている。

### (5) その他の遺構

SZ-01. 花崗岩の多い小礫と土をつき堅めて構築し、SB-02の一部をおおっており、約10cm高い。全体の大きさは壊乱されているので不明である。



第22図 SZ-03

SZ-03. SB-02の南側に存在する扁平粘板岩の集石である。その形は、東西約3m、南北約1.5mの矩形で、かまぼこ状を呈している。

SZ-09. SX-17の西側にある、花崗岩の多い小礫と土をつき堅めた遺構で、その範囲は東西約6m、南北約8mである。



第23図 SZ-12

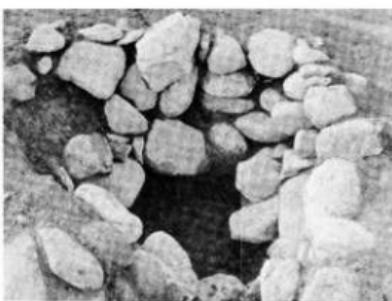
SZ-12. SB-03の南側に存在する扁平粘板岩の敷石である。一部壊乱を受けているが、その縁辺は若干の粘土を用い、そりを見せている。この遺構はSB-02・03の下層に存在する建物址に伴なうものと考えられる。



第24図 SG-01

SG-01. B区のやや西寄りのSB-09の東側にあり、大きな山石7個を巧みに湾曲状に組合せている特殊な遺構である。

この遺構の性格は不明であるが、庭石的趣きを呈している。



第25図 SX-01

SX-01. A区の東北隅に存在する水溜状遺構である。直径120m、深さ1.10mで自然石を不規則に積み上げ構築している、下方に行くに従ってその径がちぢまる。

なお、この構築材の中に破損した石臼が挿入している。

SP-01・04の水溜及び水溜状遺構とはその形態は全く異にしているが、用途については、水溜的要素が多分に強いと思われる。

SX-02. SB-02の内部にある石圓と敷石からなる遺構である。石圓の中には若干の炭化物が検出されており、さらにその付近から、土師質土

器及び鉄器類が出土している。



第26図 SX-02

SX-17. 形状はA区から南に向って矩形に張り出し、東面する石垣は146.0m(7間)である。幅は34.0m(2間)あり、西面する石垣の長さはSG-01の東でやや石を欠いているものの、20.40m(11間)でA区の付根部で3.80m西折している。石垣の高さは、東西では約6.0cm、西面では上部の石が落ちていることが確認され、約80cmあるものと思われる。概して西面する石が大きく、多くの遺構に較べ、ホルンヘルスの使用が著しい。また南端から2間北に暗渠を併設していることも注目される。(表紙写真)

なお、上記の集石遺構などにみられた、扁平粘板岩の石は、AB区の遺構面のところどころから検出されるもので、遺構の構材の一部として用いられている場合など様々であり、現在、その用途について調査している。

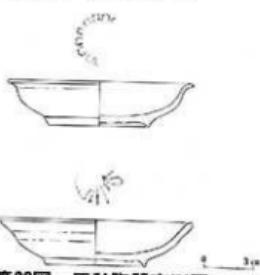
## 5. A区及びB区の遺物

### (1) 陶 磁 器

施釉の陶磁器及び無釉陶質の壺・鉢などの破片も若干出土している。これらはそのほとんどが土器(雜器)類で、中には茶器としての天目茶碗・青磁香炉の破片等が出土している。これらの遺物は、A・B・C区ともに出土しているが、その大部分はA区のSB01, SB02, SB03の主要建物



第27図 灰釉陶器



第28図 灰釉陶器実測図

の礫石群のかたわらから検出されている。

このうち注目されるのは、いわゆる美濃瀬戸焼といわれる皿類で、すべて灰釉の陶器であるが、黄釉手と呼ばれていわゆる灰和黄瀬戸の系統のものである。皿類は素地はほぼ同じやわらかい白色土であるが、大きさは、径15.7cmから、8.8cmまで大小あり、口唇部や高台の作り方にも微細な差異が認められる。釉色は淡黄緑色ではあるが、黄味の濃いものと緑の勝ったものとある。見込に菊印花が見られるものとないものとある。雛形の陶片で灰釉の下に施釉模様が施されたものも検出された。天目茶碗はC区とA区から二個体出土しているが褐色釉が厚くかかり、素直な雛形で瀬戸天目である。鉄船では片口破片なども出土している。

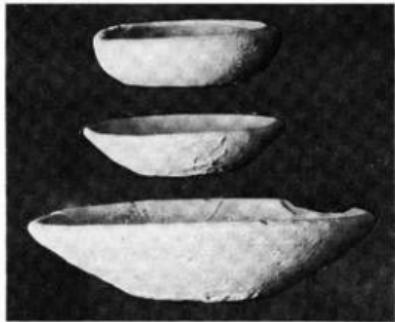
陶質の壺・鉢・抽鉢などの破片には、明らかに常滑や瀬戸地方の窯のものも認められるが、その数は微量である。抽鉢には常滑・美濃の破片が認められ、内面器壁の条線も横目を全面に

はどこしたものと、間隔をあけてはどこしたもの  
が認められる。横目は11本の条線の破片が出土し  
ている。

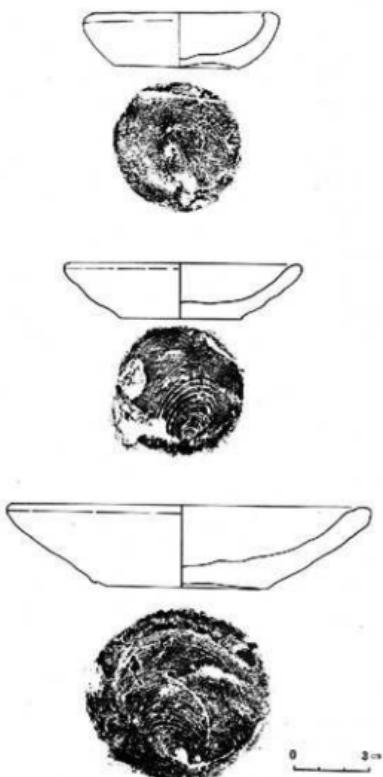
磁器類は、中国製の青磁が若干出土しているが、  
いわゆる竜泉系のもので、厚く青磁釉をかけてお  
り、その色調はやゝ緑が濃いものと、そうでない  
灰緑色の薄い色調のものがある。青磁で鏡文の破  
片も検出されたが、鏡の幅が広く彫りの深いもの  
と、地弁文の細く浅い彫りのものと認められた。  
これらの青磁は主だったものはSB01とSB02付  
近であって、瀬戸灰釉陶器と似た出土状況をもっ  
ている。SB02から出土した青磁片は獸形をした  
香炉の破片と思われ、この建物の性格をある程度  
物語っている。以上の主だった陶磁器はすべて礁  
石と同じ層から検出されたもので、その年代的な  
幅がとくに灰釉陶器においては室町末期から桃山  
初頭へかけてのものである点、この鉢跡の終焉と  
一致し注目される。なお層位的には上層の櫻冠層  
被覆土層に志野初期の破片・染付片・白磁片など  
認められる。

出土遺物全般からいえば、戦国期の武田氏一族  
の生活遺物の研究にとって貴重なものであること  
はいうまでもないが、とくに滅亡期の下限の問題  
があるだけに、遺物の編年学上重要な意味をもっ  
ているものと思われる。将来の詳しい考察をまち  
たいと思う。

## (2) 土師質土器



第29図 土師質土器



第30図 土師質土器実測図

A・B・C区の造構面より検出された多量の素  
焼の土器は形態などが土師器の杯に近似する様相  
を呈しているが、焼成や製作技法など微妙な点が  
異なっている。

この種の土器は從来、歴史的、社会的な性格に  
合致した名称がなく、土師質土器という名称でお  
おくは用いられているのでここにおいても一応そ  
れに従って土師質土器と呼称することにしたい。

これらの土器は建物址・水路・水溜等にまとま  
って検出されている場合が多い。また、これらが  
数枚重なる例や大・小二組のものが重なって出土  
する例なども見受けられ、こういった出土状況は

当時の生活の一端を如実に物語っているものと考えられる。

この土器は、多くのものの内面にスヌ（灯心皿痕）の付着が見られる点から灯明皿として最も多く用いられたと思われるが、他の用途にも用いられた可能性も十分推察できる。従ってここで一概に灯明皿と呼ぶことはできないが、日常生活で普遍的に使用されていたものであることは間違いないようである。

この土師質土器は現時点までにおいて、技法的に大きな相違点は見い出されていないが、口縁部等の形態により少なくとも3群に分類が可能である。また、口径、底径を加味して大きさによって数種のグループ分類が可能であるが、この点については本報告にゆずりたい。

#### 第1群土器

第1群土器は口縁部が玉状にふくらみまるもので、口径は5cm前後から20cm前後までの大型のものまであり、検出された土師質土器の9割強を占めるものである。色調は赤褐色ないし黒褐色を呈しており、胎土中に多量の金雲母を含んでいる。焼成は概して良い方である。外面底部はわずかにくぼみ、上げ底状を呈するものが多く、粗雑な糸切痕（ろくろ右回転）が見られる。また、粘土粒の付着や植物、スノコ状の物の圧痕などが若干見受けられる。口辺部外には指ナデにより整形され、回状をなしている。器肉はいたって厚い。スヌの付着は大多数のものに見られる。

#### 第2群土器

第2群土器は口縁部が口西部になるに従い薄くなっているもので個体数としてはわずかである。色調は赤褐色を呈し、胎土中に金雲母を含むなど第1群と同様である。底部の糸切りは比較的ていねいであり、第1群土器に見られる口辺外面の凹状痕ではなく、そのまま丸みをおびて薄くなり口縁部を形作っている。器肉は比較的薄く、第1群土器と同様スヌの付着が見られる。

#### 第3群土器

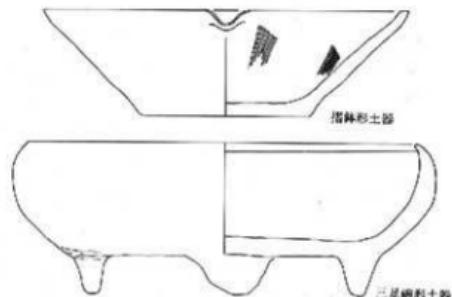
第3群土器は口縁部が強く内湾するもので第1群及び第2群土器とは形態を全く異にしている。個体数は完形が1点と破片が数例見られるのみで現在小型のものしか検出されていない。色調・胎土・焼成方法などは第1群土器と近似している。また、スヌの付着のあるものは今のところ見られない。

これらの土師質土器の中には、2点ほどあるが、製作時の糸切りと焼成時のひび割れによる底部に穴のあるいわば不良品とも言える土器が検出されている。また、内面には墨青による線を有するもの、口縁部にヘラ状器具による刻み目の見られる土器も若干検出されている。更に、鉄分の付着のみられるものもある。

#### (3) 雜 器



第31図 雜 器



第32図 雜器実測図

雜器は土師質土器と比較し、特に胎土の差はない。ただ小石を含み、金突円の量が少なくなる。色調は褐色・灰色・灰白色のものがある。器形は次のようなものか知られている。

### 三足鏡形土器

器高13cm、口径33.4cmを有し、内湾した鏡形土器である。内面整形は丁寧である。二個体が検出されている。

### 摺鉢形土器

4個体が知られている。片口で明褐色を示す摺鉢形土器は、口唇部にススの付着がある。器内横面の横目は8条を一単位とし、器内底面までは運ならず、横目間も7cm程の間隔をおいている。器内底面の条線は5単位と思われ放射状に施している。その他のものは、8乃至7条の横目を有するものと、5条の横目を有するものとが知られている。これらは皆内壁面から内底面まで条線が連なるものである。

### 鉢形土器

突起を有した変形口縁を有するものが二個体と片口状の口縁を有するものが一個体知られている。他に内耳形土器・壺形土器などの出土もあるが、いずれも小片である。

## (4) 金属製品

金属製品は、鉄製品のほか、青銅製品が何点か出土している。鉄製品はそのほとんどが刀であり、そのほかには刀子・口用器物がある。

刀は遺構面のほぼ全域から合計19点発見されているが、太さ及び長さは大小さまざまである。長いものは頭から先端まではとんど太さに変化なく、短かいものは、急激な太さの変化をみて先端に到っている。断面は正方形で、頭は鉛頭形・折曲頭形の二種類ある。

短刀は3点出土しているが完全なものはなく、鋒があるのは1点で、他は刀身から茎までが残存する。3点とも平造りであり、これは短刀や小脇差には多い造りである。区は、刀区のみであるこ

とか確認できるが、目釘穴は腐食のため見あたらない。なおA区から刀装具の切羽が1個出土している。

SX-02付近から、金管状鉄製品が出土している。全長はそれぞれ38cmであり、1対のものであることは明らかである。断面は円形であるが割合太く、頭には少々ふくらみがあり、先端の方は尖っている。

雖尤と思われる鉄製品は、非常に保存状態が良好であり、片側のみが使い込まれた様子まで知れる。全長32cmであり刃の部分は割合大きい。四角い刃の上端に二本の角状の部分がついており、木を入れ込んで用いるようになっている。接続部分はY字を呈し、刃全体はわずかに「く」の字状である。

鉛の鉄炮玉1個3匁5分がA区から出土している。その他、不明の鉄製品も数点ある。

## (5) 古 錢

跡跡のA・B・Cの各区から、中周渡來の鐵貨が散発的に出土した。数は非常に少なく、判読可能なものは、7箇だけであり、表1のとおりである。このほか、腐食や摩滅のため判読困難なもののが12箇、破片が7箇である。

これとは別に、昭和45年ころ当時土地所有者であった小沢克己氏が、B区で農作業中に地下1mくらいの、自然石で方形に囲んだ炉状の石組の隅石の上から、鐵貨247箇を発見している。

その石の上には、下の石より少し大きめの石が載せてあったということである。現在確認できるものは44種209箇に及ぶ。詳細は表2のとおりである。今回出土した7箇も表中のいすれかの種類に含まれる。

209箇中最も新しいものは、明錢の宣徳通宝(1433)で、日本では室町時代中期の永享5年にあたる。また、南宋錢の大宋元祐1箇と、元錢の至大通宝1箇があるが、これらは渡来数の少ないものである。

勝沼氏館跡出土銭 第1表



第33図 古 銭

B 区 小沢氏 烟出土銭

第2表

国名	錢貨名	西暦	箇数	国名	錢貨名	西暦	箇数	国名	錢貨名	西暦	箇数	
唐	乾元重宝	759	2	北宋	治平元宝	1064	9	金	嘉定通宝	1208	2	
	開元通宝	845	4		熙寧元宝	1068	12		大宋元宝	1225	1	
北宋	太平通宝	977	4		元豐通宝	1078	11		紹定通宝	1228	1	
	淳化元宝	990	3		元祐通宝	1093	17		淳祐元宝	1241	1	
	至道元宝	995	10		紹聖元宝	1094	12		皇宋元宝	1253	4	
	咸平元宝	999	3		元符通宝	1098	1		景定元宝	1260	2	
	景德元宝	1005	4		聖宋元宝	1101	5		正隆元宝	1158	1	
	祥符元宝	1008	6		大觀通寶	1107	5		大定通宝	1178	1	
	祥符通寶	1008	2		政和通宝	1111	11		元	至大通宝	1310	1
	天禧通宝	1018	3		宣和通宝	1119	2		明	大中通宝	1361	1
	天聖元宝	1023	8	南宋	淳熙元宝	1174	3		洪武通宝	1368	5	
	景祐元宝	1034	3		紹熙元宝	1190	1		永樂通宝	1368	3	
	皇宋通宝	1039	19		慶元通宝	1195	2		宣德通宝	1433	3	
	至和元宝	1054	5		嘉泰通宝	1201	1		朝鮮	朝鮮通宝		
	嘉祐元宝 嘉祐通宝	1057	10								1	

## (6) 石 製 品

## 硯形石製品

直徑7.3cm、厚さ0.6cmを有する泥岩質の石製品である。縁の高さは2mm程しかなく欠損が著しい。また表面は球状に盛り上がる。外縁とともに研磨してあるが、底面は自然面をのこしている。あるいは欠損のためか。

## 石 目

A区東北隅に存在する水滴状遺構の側石に石磨臼が使用されている。

この石磨臼は全体の約 $\frac{1}{5}$ 程度しか残存していない

いが年代決定の決め手になる貴重な資料の一つと考えられる。これによって、少なくともこの水滴状遺構の構築年代はこの石磨臼の使用期よりさかのぼることはありえない。

## 石 磨 臼

石磨臼とは一般に石臼と称せられるものである。臼には普通鐵臼と茶臼が存在するが、本遺跡のものは形態上から茶臼と推定される。下臼である。磨面の径は約10cm、磨面から底面までの高さは約13cmである。粉受け用の「皿」を有しているが、皿部は破損し、形態は明らかでない。「目」



第34図 現形石製品



第35図 茶臼

は8単位11~12条ではないかと推測できる。材質は砂岩である。

鉛磨臼・茶臼とも中國から粉食・茶が導入された時、それに使用される道具類とともに招来されたものと一般的に言われている。それが我が國にいつ頃もたらされたものかはっきりわからないが、少なくとも中世鎌城等からはしばしば出土しているようである。本県においては大泉寺茶臼が有名である。

#### (7) その他の遺物

縄文時代・早期茅山式・前期十三  
型式・中期の各型式・後期壺之内  
式などの土器がある。弥生・古墳時代のものは、  
確定しがたい資料が若干ある。歴史時代に入って、  
本館跡経営時以後、江戸期のものも若干認められ  
た。

### 6. C区の遺構遺物

SH-02から東に広がる場所である。中核部からC区まで、小字が「御所」でこの東は「水上屋敷」である。C地区の東南部日川側は地形が急に低くなっていたが、他はほぼ平らである。

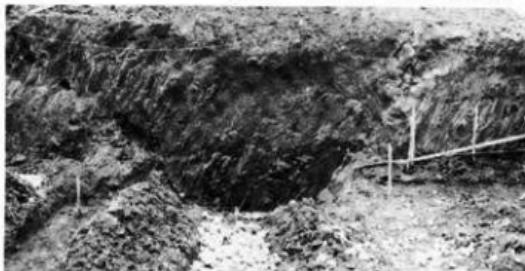
#### 遺構

SCX-01、内側に面をそろえた一対の石列である。水上屋敷から続きC地区で北に折れている。A、B地区にある溝に比較して、巾はやや広く、浅い石列の上面は平らによく削えてあり石組はしっかりしている。底部は水平およびV字形を呈しているが、遺構の東端と北端の様相を検出し得なかった。しかし、A区の調査結果よりして、水路址と考えるのが妥当であろう。

SCD-01、SCP-02の東と西に接続している。西は擾乱を受けて末端が不明で、東はC地区より東に延長している。

SCP-02、浅い水溝である。北側の壁は二次的に溝として使用されSCD-01に接続していて、著しく擾乱されている。

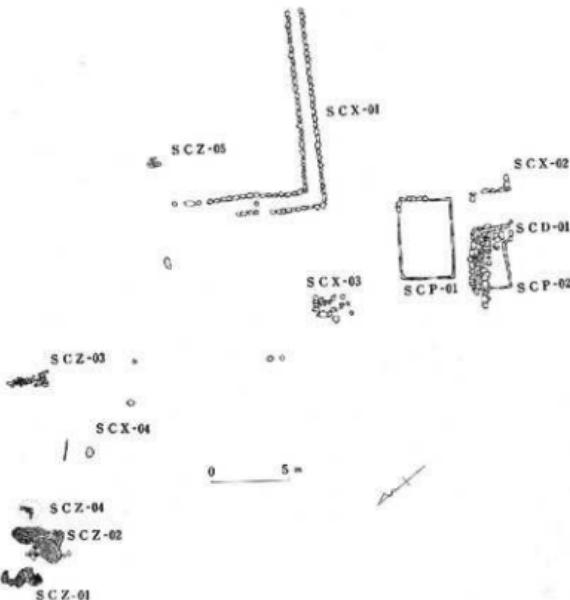
SCP-01、石積は二段であってSCP-02より浅



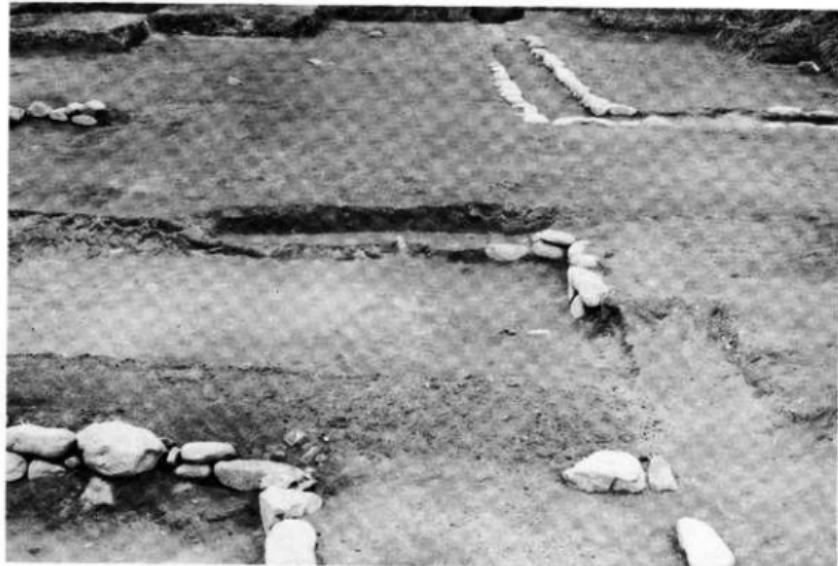
第36図 SH-03

い。擾乱が著しくわずかに石が残っているだけであったが、U字型に削られた底が残っていた。

SCZ-01、S字状に扁平粘板岩を一枚づつ敷きつめ、長さは約1.5mでやや西に傾斜している。



第37図 C区実測図



第38図 C区遺構

SH-03, SH-02の外(東)側にありその形態規模等の全様は明らかでない。底に泥炭層があり、植物遺体が包含されていた。

#### 遺物

土師質土器・骨製品等が出土したが量は比較的少なかった。土師質土器は形態・法量・胎土・焼成・色調等がA・B区出土のものとほとんど同じである。

## 7. 館跡の浅層地質と水

館跡の用水が、湧水か流水であったかを解明するため、1地形・地質調査、2比抵抗法による電気探査、3採取したローム層や岩片等の物性の室内実験等を行って検討中である。

現在、2による浅層地質の様子が少しあわかったので、ここにその結果の一節を紹介する。

館跡地表面から順次下にむかって、 $d_1 \cdot d_2 \cdot d_3 \cdot d_4$ の4地層があつて、これより下には本地域の基盤岩類である粘板岩やホルンフェルス等の硬岩からできあがっている。

$d_1$ は厚さが0.3~0.7mで、粒子面接觸の大小・粘性の多少等から考えると、表土ならびに表土に暗褐色ソフトロームが少し混入した層で、これは比較的よく雨水を浸透させる性質がある。

$d_2$ は厚さが0.6~1.2mで、粘性が高く、低比抵抗値を示す。粒子面接觸は4層の中で一番大きく、ハードローム層といえる。一部岩錐状堆積層が交錯している所もあり、ここで比抵抗値が高くなっている。

$d_3$ は厚さが1.0~2.6mで、中位から高位の比抵抗値を示し、粒子面接觸は比較的大きく、疊まざり砂層と考えられる。この層は川によって運搬されて来た花崗閃綠岩・粘板岩・ホルンフェルス等の礫や、それらが風化して砂土となって堆積してできた層と思われる。

ただ、堀といわれている所の本層は、比抵抗値

が低いので粘土層といえる。

$d_4$ は基盤岩類の上に不整合にのる礫層で、厚さは1.5~3.5m前後、礫の大きさは0.5m前後の花崗閃綠岩やホルンフェルス等の円礫から亜角礫を主としているが、ときには1m以上の巨礫もある。

さて、これら本館跡の4層のうち、地下水が存在すると考えられるのは、 $d_4$ 層と基盤岩類との境のみである。この水を利用するとなると、3.4~8.0m前後も掘さくしなければならない。 $d_2$ が不透水層であるから、そこまでは井戸掘りをしなかったものと推定出来る。

したがって、本館跡の東側に存在したと考えられる湧水を、不透水層の $d_2$ 層に溝を作つて流水路として、本館跡に導入しその水を使用したものと考えられ、現在、この湧水又は水源地と考えられる場所を検討している。

## 8. 館跡にあるヤダケについて

館跡の南側に竹ではマダケ属 (*Phyllostachys*) のマダケ・笹ではメダケ属 (*Pleioblastus*) のアズマネザサ・ヤダケ属 (*Pseudosasa*) のヤダケの三種の竹箭類が見うけられる。

これら三種の中でもヤダケが一番多く、その幹の太さは4センチメートルほどにも達しているものもある。

ヤダケは有用竹の一つであるだけに、往時からすでにこの館跡周辺で栽培していたことも想像できる。

これに対して、マダケは、日川沿岸にアラカシ・エノキなどとともに混生しているが、規模も小さいし、数も少ない。

またアズマネザサは、野生状態のものが、館跡の畠の周辺に侵入したものであろう。

特に館跡南側に著しいヤダケについてのみふれる。

は別名ではノダケ・ヤノダケ・シノベチク・コバシダケとも呼ばれているものである。

桿の高さは4.5m、その幹周は4cm、節間の長さは30cm位である。

枝は各節から1本づつ出て、桿鞘（かんしょう）と呼ぶさやは白っぽい。葉はせまくて細く、その長さは8~30cm、幅は1~4.5cmで無毛でつやがある。葉は1年目の桿の先につき、下部の葉は水平につくが幹の先端についたものは立っている。

さやには、あらい毛があるが、下部にいくにつれて、この毛も少なくなる。さやは節間よりも長く、古い桿では、さやが腐ってくるので途中から折れる。



第39図 館跡にあるヤダケ

節間が30cm内外もある、材質が丈夫で、節が低く、まっすぐで、枝をきりとっても切口が小さくて、見苦しくない。

このため古くから矢・筆の柄・釣竿・ネックレス・飾物などの材料とするほか、桿が直立し、葉に光沢があって緑が美しいので庭園に植えられることも多い。

勝沼館跡でのヤダケは、前記したように、本種が勝沼氏が栄えた鎌倉時代の当時において、すでに有用竹類の1つとして栽培され、これが今日まで残存しているとも考えることができる。

## 発掘景観



第40図 発掘前の地貌



第41図 館から崖下をのぞむ



第42図 伝承から実証へ  
昭和48年12月末調査開始。この後保存決定なる（昭和49年2月）



第43図 敷かれた石  
昭和49年3月第3次調査



第44図 土壘検出  
昭和49年7月第4次調査



第45図 戦国期生活の実感  
昭和49年8月第4次調査

### 編集後記

これは一昨年暮、調査を開始してから山梨県民の間に話題を投げかけた勝沼氏館跡の調査概報です。

この中間報告書は、多くの県民や研究者に遺跡を早く、広く紹介する目的で、研究者には中間の概報とし、一般県民には遺跡の紹介を兼ねて刊行したものです。

勝沼氏館跡は調査以前においては県民や地方史研究家にその存在をあまり知られていない遺跡でありましたが、今回の調査によって次第にその全貌が明らかになったのであります。さらに、我が国の館城、とりわけ中世館城はそのほとんどが何らかの形で破壊の危険にさらされようとしているのが現状です。遺構は国指定特別史跡朝倉氏館跡によく似ており中世史を知る上で貴重な文化的な遺産と認識する次第です。私共は発掘調査では遺構遺物の一つ一つに細心の注意を払い客観的事実を慎重に検討しており、早急な結論は極力避けたつもりですが、先学諸兄におかれましても私共のこの姿勢に対してなお一層のご理解とご協力を下さるよう望む次第です。

最後になりましたが、中核部全面保存が決定されるまで温かい激励やご協力をいただいた県民の皆さん、また県および町当局並びに地元のご尽力、ご苦労に対し感謝の意を表するとともに今後とも一層のご協力をお願いする次第です。

更に、調査半ばにしてご逝去された調査団長代理故佐藤森三先生に対し深く敬意を表するとともに先生のご冥福を心からお祈りする次第です。

勝沼氏館跡調査団

# 勝沼氏・武田氏略年表

西暦	日本	勝沼氏	武田氏
1505	永正2		9, 武田信昌死去
1507	永正4		2, 武田信繩死去
1508	永正5		10, 信繩の異母弟油川信惠戦死
1519	永正16		12, 信虎甲府へ移る
1520	永正17	「御奉加鳥目百匹武田左衛門大輔信友」 (岩殿七社権現棟札)	6, 信虎積翠寺に要害城を築く
1521	大永元		11, 武田晴信誕生
1526	大永6	「奉再立正八幡宮隨神殿之事敬白大壇 那武田信虎勝沼氏信友」石橋八幡神社 棟札	5, 一条道場の棟上げ
1535	天文4	8, 大輔殿(勝沼信友)北条氏綱軍と都 留郡にて合戦討死 (妙法寺記)	6, 信虎駿河に出兵
1537	天文6		2, 信虎の女、駿河の今川義元に嫁す
1540	天文9		5, 信虎、信濃佐久郡を攻略。晴信出 陣。(20歳)
1541	天文10		11, 信虎の女、諏訪頼重に嫁す
1542	天文11	10, かつぬま殿、信濃大門峠の合戦の 際逸見峠・南部殿・栗原殿・日向大和 守と共に諏訪の城に布陣(甲陽軍鑑)	6, 信虎(48歳)、子の晴信(信玄)に追 放され今川義元を頼る。
1546	天文15	10, 勝沼氏、上杉憲政の関東勢と笛吹 峠(碓水峠)にて、板垣信方を大将と し小山田、栗原、逸見、おぞ、南部 日向、小宮山氏等と共に合戦に出陣 (甲陽軍鑑)	7, 晴信、諏訪頼重を幽閉し、ついで 自殺させ諏訪郡を奪う。
1547	天文16	10, 勝沼殿、信濃海野平における長尾 景虎(上杉謙信)との合戦に陣備えの 御後として出陣。 (甲陽軍鑑)	3, 晴信、村上義清と信濃上田原に戦 って敗れる。この年、勝頼誕生(母 諏訪頼重の女)
1548	天文17		この年「甲州法度之次第」を制定。
1550	天文19	8, 信濃、深志攻略その他に勝沼衆出 陣。 (甲陽日記)	2, 晴信、村上義清と信濃上田原に戦 って敗れ負傷する。
1553	天文22	5, 勝沼五郎、信濃桔梗原の小笠原長 時との合戦に出陣。 (甲陽軍鑑)	8, 晴信、長尾景虎と川中島に戦う。 (第1回川中島戦)
1555	弘治1		第2回川中島戦
1557	弘治3		第3回川中島戦
1560	永禄3	11, 「逆心の文あらはれて勝沼五郎と の御成敗」される。 (甲陽軍鑑)	



昭和 50 年 3 月 31 日

発行 山梨県教育委員会  
編集 勝沼氏館跡調査団  
印刷 ヨネヤ印刷